

## 鈴木陽美

## 歌境の深まり

・小石の影のうへに小石を置くやうにたしかめてをり今のこころを  
 第六歌集。『午後の蝶』は二〇一四年の一  
 年間の『短歌日記』をまとめたものだつた  
 が、本歌集は二〇一二年から二〇二〇年初  
 夏までの作品四六一首が収録されている。  
 表紙にグラシン紙を巻き込んで折り返した  
 仮フランス装、天アンカットの瀟洒な一冊。  
 ・星明り強かりし世よただ一人のひとに呼  
 びかく／疾く来りませ

（『疾く来りませ』）のフレーズは讃美歌  
 九四番の歌詞が元になつてゐるといふ。あ  
 とがきに「イエス・キリストを待ち望む、  
 素朴でひたすらな信仰があらわれたこの言  
 葉に心惹かれます」とあつた。キリスト教  
 の信仰をよりどころにしている作者の思い  
 が、歌集タイトルにこめられているようだ。

・枇杷の花の蜜を逆さになりて吸ふ小鳥の  
 重さわが掌は知らず

『とく来りませ』は『午後の蝶』に続く  
 第六歌集。『午後の蝶』は二〇一四年の一  
 年間の『短歌日記』をまとめたものだつた  
 が、本歌集は二〇一二年から二〇二〇年初  
 夏までの作品四六一首が収録されている。  
 表紙にグラシン紙を巻き込んで折り返した  
 仮フランス装、天アンカットの瀟洒な一冊。  
 ・星明り強かりし世よただ一人のひとに呼  
 びかく／疾く来りませ

（『疾く来りませ』）のフレーズは讃美歌  
 九四番の歌詞が元になつてゐるといふ。あ  
 とがきに「イエス・キリストを待ち望む、  
 素朴でひたすらな信仰があらわれたこの言  
 葉に心惹かれます」とあつた。キリスト教  
 の信仰をよりどころにしている作者の思い  
 が、歌集タイトルにこめられているようだ。

・枇杷の花の蜜を逆さになりて吸ふ小鳥の  
 重さわが掌は知らず

・小石の影のうへに小石を置くやうにたしかめてをり今のこころを  
 いずれも繊細な感受性と細部を凝視する  
 まなざしが、一字一句ゆるがせにしない修  
 辞への心配りと相俟つて美しい作品世界を  
 構築している。「小鳥」「小石」の小さなも  
 のや、つかみどころのない「影」というモ  
 チーフを通しての心象の表出に注目した。  
 ・泰山木の白花ふたつのこる午後日傘のう  
 すき影を運べり

・帰りきたる部屋の鏡につかの間をひとが  
 見てぬしわれを映しつ  
 主体の描き方が直截ではないところに情  
 感がある。言葉の襞を押し分けしていくよう  
 に歌を読むよろこびがあるのも横山作品の  
 魅力のひとつだ。

一方、この歌集は作者の新たな一面も見  
 せてゐる気がした。  
 一方、この歌集は作者の新たな一面も見  
 せてゐる気がした。  
 一方、この歌集は作者の新たな一面も見  
 せてゐる気がした。

この作を含む「空間」一連は、詞書によつ  
 て久保田利伸のライブがテーマとわかる。  
 開演と終演後の時刻を記す工夫もあり、一  
 首一首がライブの高揚感・臨場感を伝えて  
 いた。今までの横山作品には見られなかつ  
 たテーマと試みではないだろうか。

本歌集は第八回佐藤佐太郎賞を受賞し  
 た。ますますの歌境の深まりを示すひとつ  
 の到達点ともいえる歌集である。

「汚」は原発事故後の放射性物質による汚  
 染をいう。「杏の木」や「木槿の花」を見つ  
 めつも声高ではない時事詠となつてゐる。  
 ・厚き本の燃えがたければ羽のごとくひら  
 きて置かる胸の上へと  
 まるき大腿骨頭はわれが  
 感情表白は極力抑えられているが一首目  
 は二〇一八年七月五日父横山泉死去、  
 二首目は「父は医師だった。」の詞書をもつ。  
 家族を詠うことの少ない作者だが、敢えて  
 父の名前を含む厳然たる事実を詞書に出し  
 ている。作者自身の文体を崩すことなく詠  
 まれた挽歌は、読者の胸にしづかに迫る。  
 ・眼に見ゆるひとつずの音を指すごとくこゑ  
 は貫くこの空間を

この作を含む「空間」一連は、詞書によつ  
 て久保田利伸のライブがテーマとわかる。  
 開演と終演後の時刻を記す工夫もあり、一  
 首一首がライブの高揚感・臨場感を伝えて  
 いた。今までの横山作品には見られなかつ  
 たテーマと試みではないだろうか。